

葦山江川氏の出自と下向

伊藤 拓也

§0. はじめに

§1. 京都姉小路烏丸の宇野氏

§2. 伊豆国下向をめぐって

§3. むすびにかえて

梗概

戦国期の葦山（静岡県伊豆の国市）の江川氏（近世の葦山代官の先祖）は、大和国（奈良県）出身で大和源氏の末裔と伝わる。その出自について、京都は姉小路烏丸（京都府中京区）のいわゆる町衆（土倉・酒屋）の宇野氏が伊豆国（静岡県東部）に下向したものが江川氏であると考えた。そして下向の時期を明応期（一四九二～一五〇一年）ごろ、伊勢（北条）早雲が伊豆国主になった頃と考えた。下向した際の最初の居住地・名字の地はのち近世の内中村（静岡県伊豆の国市）にあたる地であり、そこから早雲に葦山城の東側に屋敷（のちの江川邸）を与えられ、そこを本拠としたと推定した。

キーワード・伊豆国、宇野氏、江川氏、江川邸、土倉・酒屋、葦山、本圀寺、町衆

はじめに

葦山（静岡県伊豆の国市。以下、現在の地名で静岡県は略）の江川氏は、近世の葦山代官としてよく知られている。葦山代官は、江戸幕府の財政基盤にして重要な権力基盤たる幕府直轄領を支配・管轄する地方官僚である代官の代表例ともされる。武蔵国・相模国・伊豆国・駿河国（おおよそ現在の埼玉県・東京都・神奈川県、静岡県の東部と中部）などの直轄領を支配・管轄した。幕藩制構造論や国家論・地域史研究

を踏まえた幕藩制社会の地域的展開という近世史の重要な研究テーマのなかで、重要な事例のひとつと位置付けられ、厚く研究が積み重ねられている⁽¹⁾。その研究上、江川氏は、その性質の前提として、中世以来の土豪とされている。戦国期は小田原北条氏（以下、北条氏）の時代にその直轄地の代官をつとめる一方で江川酒という全国的に有名であった名酒もつくり、本拠地の金谷郷（伊豆の国市）では領主となった。この江川氏は、宇野氏という一族が、伊豆国に下向して葦山に程近い「八牧郷江川」（伊豆の国市）を居所としたものとされる。

ただ下向以前の出自については諸説あり、謎に包まれている。子孫の伝承では、大和国（奈良県）の大和源氏の宇野氏が鎌倉期に伊豆国に下向し、鎌倉御家人になったとされる（後掲註30『寛永諸家系図伝』一八六頁）。いっぽう播磨国（兵庫県）出身とする説もある。大和国もしくは播磨国の国人宇野氏の一族で、京都にて酒造を学び、伊勢（北条）早雲⁽²⁾に招かれて伊豆国に下向し、三島（三島市）に土着したものと推測されている⁽³⁾。以前、拙稿にて戦国期の江川氏を分析した際には、下向以前については、いずれの説とも決しがたかった⁽⁴⁾。京都の杜氏が早雲の招聘をうけて伊豆国に下向したという杉山茂氏の主張は、仲田正之氏にも支持されている⁽⁵⁾。葦山向以前は京都にいた可能性が高いとは考えていたが、確証まではないと考え、ひとまずその判断を避けた。

しかしこのたび、京都にいたことを確定しうるような同時代史料、つまり京都にいた頃の江川氏の前身である宇野氏について窺わせる史料が二点、管見に入った（東京大学史料編纂所ホームページのデータベース検索 [https://www.ap.h.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller] による。閲覧日二〇二一年三月四日）。これはすでに翻刻され活字化・公開されている史料ではあるが、これを改めて検討することで、京都における宇野氏の所在地やそのなりわいについてかなり詳しく知ることが出来た。

宇野氏はいわゆる京都の土倉・酒屋だったわけだが、土倉・酒屋については最新の研究にて、従来考えられてきた金融業者・酒造業者という理解に再検討を迫るような画期的な成果が出されたところである⁽⁶⁾。本稿では、この二つの史料と最新の研究成果に学びつつ、これまでよく分からなかった江川氏の出自や伊豆国下向の時期などについて、同時代史料の不足など史料的制約により推定を交えながら⁽⁷⁾だが、検討したい。

第一章 京都姉小路烏丸の宇野氏

江川（宇野）氏は伊豆国に下向する前、京都で酒造業などに従事していた。その説を裏付けうる同時代史料は二点ある。ともに明応

期（一四九二〜一五〇一年）頃のものとする⁽⁸⁾、室町幕府による京都の土倉と酒屋に対する課税に関するリストである。まずは一点目を次に示す。

【史料1】酒倉味噌役免除在所注文（『大日本古文書』蜷川家文書之二一三〇四号）

*傍線伊藤、傍注も適宜入れている

免除在所之事

（中略）

一 舟橋南西々（類、以下同）

野洲井

同前、（酒役）以前壹貫四百文進納候、

（中略）

一 四（小、以下同）条油少路東南々

宇野

酒役、壹貫文進納之由候、

（中略）

一 錦少路西洞院南西々

中村

酒役、以前壹貫四百文進納之由候、

（中略）

一 姉少路烏丸北東々

宇野孫太郎（本）

同前、（酒役）壹貫文進納之由候、味曾方、（贈）三貫文進納之由候、

（中略）

一 北少路室町北東々

中興又四郎

酒役、号竹倉之時ハ、壹貫四百文、其以後七百文進納之由候、

（中略）

一 同東辻子南々（西小路）

中興

同前、（酒役）以外無力之由候、但如何、

（後略）

これは、京都の酒屋に対する室町幕府の免税者リストである。土倉・酒屋として知られる野洲井氏・中村氏、そして「柳酒屋」として著名な中興氏らがリストアップされている。それに並んで、傍線（実線）の宇野孫太郎（宇野孫太郎）という人物が、酒役と味噌役を幕府に納めていた（このたび免除された）。

孫太郎が住む姉小路烏丸北東類は、姉小路通と烏丸通が交わる所の北東の角、いまは京都府中京区の太陽生命御池ビルがあるあたりである。同じ所に住む宇野氏が、次の二点目の史料にて、今度は土倉としてあらわれる。

【史料2】土倉酒屋注文（『大日本古文書』蝮川家文書之二一三〇五号）

納錢方

北少路猪熊（不以下同）南西類 馬場 壹貫五百文

木下 北西類 福井 貳貫五百文

同 南西類 中村 參貫文

（中略）

北少路室町北西類（無力五申問 臨時付置之） 尾崎 九百文（無臨時）

同 一色殿跡北西類 柳木 五百文 同

同 鞍馬松倉 宇野 五百文 同

（中略）

同 安居院大宮東南類（遠藤） 同後家 四百文（無臨時）

以上貳拾七貫七百文

土倉

木下南西類 中村 壹貫五百文

（中略）

西大路町北東類（味曾 贈 以下同） 中井 壹貫五百文

同室町北東辻子（味曾） 富田 陸百文（六） 無臨時

以上拾五貫四百文

下京酒屋

五条坊門室町東南類 澤村彦次郎 壹貫文

*傍線伊藤、傍注も適宜入れている

(中略)

五条坊門西洞院南西類 中興 貳貫八百文 (無臨時)

(中略)

法性寺下井 八百文 (無臨時)

以上參拾貳貫四百文

土倉

臨時御免 五条坊門西洞院南西類 中興 參百文 (無臨時)

無力前、臨時無 春日室町北東類 片山 貳百文 同

同 姉小路烏丸北東類 宇野 四百文 同

味噌 六角室町西南類 熊木 壹貫五百文

春日室町北東類 片山 貳百文 同

以上貳貫六百文

この史料は、幕府による土倉役と酒屋役の納税者リストである。上京(当時の京都の北部)と下京(同じく南部)の土倉・酒屋がリストアップされている⁽⁹⁾。傍線部(実線)に、下京の土倉として、史料1と同じ姉小路烏丸北東類に住む「宇野」がみえる。この宇野は孫太郎と同一人物、もしくはその一族であり⁽¹⁰⁾、今度は土倉として、やはり幕府に土倉役を納めていた。この姉小路烏丸の宇野氏は同じ家で土倉・酒屋であったとみるべきであろう。宇野氏は、史料1の傍線部(破線)の四条油小路(京都府下京区)の酒屋宇野氏や、史料2の傍線部(破線)にある上京の酒屋、鞍馬松倉(京都府北区、もしくは同府左京区カ)の宇野氏も所見がある。どうやら当時の京都に何流か宇野氏がいたようであり、それらは基本的に一族であったと思われる⁽¹¹⁾。

そのなかで、姉小路烏丸の宇野氏の一流(以下特記なき限り、これを宇野氏とする)が江川氏の前身であったと考えられる。江川氏に、宇野孫太郎の子孫、もしくはその名跡を継いだとみられる人物がいるためである。江川孫太郎という、当主の庶子とみられる人物である(註4拙稿注一三)。活動時期は一六世紀半ばごろで同時代史料に所見がある⁽¹²⁾。

そして江川氏には伊豆国下向後も京都とのかかわりがあり（前述）、東国ではなく、京都の法華宗寺院である本圀寺（京都府下京区。いまは移転して同府山科区）と密接な師檀関係にあった⁽¹³⁾ことを示唆する同時代史料が散見される⁽¹⁴⁾。また周知の通り、江川酒という名酒を製造していた。高品質な清酒であったとみられている⁽¹⁵⁾。当時の酒造業の中心は、おおよそ京都はじめ畿内近国であり、名酒とされる高品質な清酒はそこでつくられたとされる⁽¹⁶⁾。江川氏の前身を宇野氏と考えると、江川酒のような名酒を、遠く伊豆国で戦国期から製造できたことにも容易に説明がつく。

ところで土倉・酒屋といえ、従来ならば即座に、金融業者・酒造業者を営む京都の町衆というような理解となる。だが先にも述べたように、最新の研究では、その理解が批判されている。土倉・酒屋の理解に批判が加えられ、再検討を要し大きく揺れているのである。酒匂由紀子氏により、次のような批判・再検討がなされている。土倉・酒屋といっても、必ずしも金融業者・酒造業者とは限らない。戦国期の京都においては応仁の乱以前からいる土倉・酒屋、寺社に属してそこで担っていた職務に従事していた僧形（法体）の人々だけでなく、乱以後に急増した「俗体」の人々もありうる。後者の多くは「武家被官」、ここでは細川氏・山名氏・伊勢氏などの有力武士の被官（家来）となっている人々で、上洛して土倉・酒屋となっていた屋敷に滞在し、土倉役や酒屋役などの課税には応じている人々である。彼らは、酒造業などの業務には必ずしも従事していない。裕福であるのは確かだが、その富を京都で稼いだとは限らず、地方出身で上洛して富を持ち込んできた者が少なくない⁽¹⁷⁾。

ただ、宇野氏は、のちの江川氏が江川酒をつくっていたことから、酒造業には携わっていただろう（味噌もつくっていたかもしれない）。酒匂氏も注意深く叙述されるように、当然、全ての土倉・酒屋が右のような類型にあてはまるわけではない。実際、酒造業を営む「武家被官」である土倉・酒屋の著名な類例がある。中興氏、戦国期の「柳酒屋」である。当時別格と称された京都の名酒「柳酒」をつくった土倉・酒屋である⁽¹⁸⁾。

酒匂由紀子氏によれば、中興氏は史料上「伊勢御被官」、つまり伊勢氏の被官としてみえる⁽¹⁹⁾。伊勢氏は、そのトップは室町幕府の政所執事（事務方トップ）を世襲して京都の財政を担い、その被官が幕府の土倉役・酒屋役の徴収にあたっていた。京都で金融業や酒造業を営むのであれば、主人とするのいうつな「武家」であったといえる。そして中興氏は地方に拠点をもった形跡が特になさそうであり、「柳酒屋」は当時の京都で最も繁盛した酒屋である。富を京都で築き、利害にかなった主人として伊勢氏を選びその被官となったと推測される。「武家被官」でもある京都のいわゆる町衆、とでもいえようか。ちなみに法華宗の信者であったことも知られている。

この中興氏は前掲史料1と2にもその名があり、京都の土倉・酒屋として、何流かいて繁栄したことがうかがわれる。この点も宇野氏と共通する。しかも同じく法華宗の信者であったとみられる（前述の本圀寺との師檀関係）。そして何より、繰り返しになるが、宇野氏は下向後に名酒江川酒をつくっていた。中興氏と同じく、名字があるのもちろん「俗体」で、京都では酒造業に実際従事していたとみられる。よって宇野氏一族は、中興氏一族と規模は違うかもしれないが、かなり似た存在、つまり「武家被官」でもある京都のいわゆる町衆であったと推測される。

姉小路烏丸の宇野氏も、中興氏と同じく伊勢氏と被官関係を結んでいたのかもしれない。伊豆国下向後に江川氏の主人となる早雲は、その出自が、伊勢氏一族のなかで重きをなしていた備中伊勢氏なのである。本家の京都伊勢氏と姻戚関係もつくり、伊勢貞親（伊勢氏本家の最も著名な当主）のきょうだいの一人が備中伊勢氏の当主盛定と結婚し、子供が生まれた。その一人が伊勢盛時、つまり早雲である。宇野氏の下向の理由も、それを語る史料がなく詳しくは分からないが、伊勢氏との関わりが寄与している可能性がある。

第二章 伊豆国下向をめぐる

(一) 下向の時期

江川氏の前身が宇野氏であったとすると、伊豆国への下向の時期もおおのずと絞られてくる。前掲史料1と2から、明応期（一四九二—一五〇二年）頃まで宇野氏は京都にいたことが分かる。そして、下向後の江川氏の同時代史料での初見は、次の史料である。

【史料3】本圀寺役僧連署書状（「江川文庫」H8—36⁽²⁰⁾）

〔切封書引〕

就当寺後住之儀、則以使者可申候処、依有子細、于今延引、非如在候、乍去、近日属無事^候、大藏卿日助相定候、千秋万歳目出候之条、使僧差下被申候、委曲猶爰元之時宜可被申候間、不能詳候、恐々謹言、

評定行事

七月三日

（永正一八年）

日翁（花押）

一和尚

日善（花押）

江川殿

（英景）

御宿所

これは江川氏の子孫に伝来する史料であり、傍線部のように充所が「江川殿」となっている。永正一八年（一五二二）には、既に宇野氏が伊豆国に下向したうえで、名字を江川に変えていたことが確実である。さらに伊豆国での江川氏の菩提寺である本立寺（法華宗、伊豆の国市）の創建が、文亀元年（一五〇二）とも伝わる²¹。文亀元年は、二月に明応一〇年から改元した年である。この伝承を信じるならば、下向は明応期に遡りうる²²。

いずれにしても宇野氏は、早雲が伊豆国の国主になったところに下向し、名字を江川に改めたということになる。早雲は、明応二年（一四九三）に伊豆国に侵攻し、同七年（一四九八）に同国を平定したことが知られている。

(二) 最初の居住地

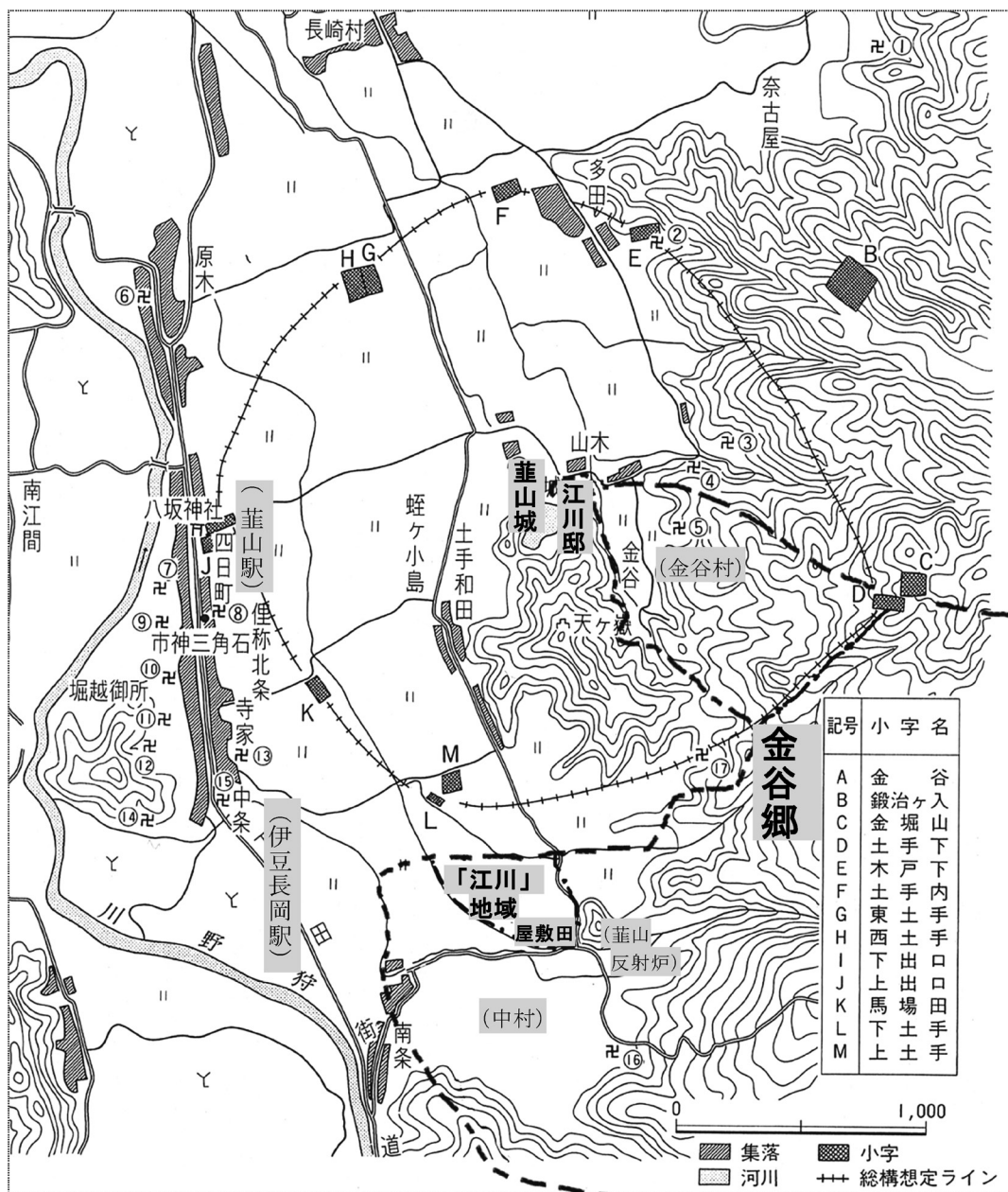
さて、江川氏が名乗った江川とは、もちろん、下向した先の居所の地名とみられる。葦山そのものというより、そこにほど近い「江川」とも伝わる場所である（前述）。拙稿²³では、先論²⁴の推定に従い、江川氏の本拠地となる金谷郷（伊豆の国市）の南部の、葦山古川のほとり、いまは葦山反射炉（伊豆の国市）のあるあたりとした。葦山古川は江川とも呼ばれたと伝わり、宇野氏はその川の名を名字としたというわけである。

名字の由来はそれで良いと思う。だが江川氏の最初の居住地は、反射炉とは少し違う場所であったと思われる。金谷郷は、戦国期に江川氏が領主となる郷村である。近世となっても、江川氏はその地域にいる。よって、下向した土地は、少なくとも江川氏が所有にかかわる権限を有していたはずである。そうして近世初頭、戦国時代が終わったばかりの段階である天正一八年（一五九〇）の検地帳²⁵をみるに、それに該当しそうな葦山古川のほとりの土地は、一か所しかない。金谷郷のうち近世初期に分村して内中村となる地域（伊豆の国市内中）である【地図】。以下、「江川」地域。江川氏は、ここの土地すべてを「江川分」として独占していた²⁶。

以上から、次のように推定しうる。伊豆国に下向した宇野氏は、「江川」地域の「屋敷田」（近代に小字名として所見）と呼ばれたあたりに屋敷を構え居住した。そこを拠点に、葦山古川（いまと若干流路が違う）と山之堰（近世初期、寛文七年（一六六七）の絵図には確認される用水²⁷）とに挟まれた土地を囲い込み、北方に向け開発していった。その結果が、近世初頭における「江川」地域（のちの内中村）の独占であった。

(三) 「酒部屋」（江川邸）と代官任命

先にも述べたように、宇野氏が下向して江川氏になったところ、伊豆国の国主、支配者は早雲となっていた。近世初期の系図に、早雲が江川氏をつくる酒を愛して「酒部屋」をつくり、酒を「江川」と命名したと伝わる（後掲註30『寛永諸家系図伝』一八六頁）。この「酒部屋」



【地図】葦山周辺概念図（『静岡県史』通史編2—1134頁の地図に加筆、加工）

*①国清寺 ③香山寺 ④浄念寺 ⑤本立寺 ⑥長源寺 ⑦昌溪院

は、江川邸主屋の前身にあたる建物⁽²⁸⁾にあたると思われる。マーティン・モリス氏は、この建物を一六世紀前半に建てられた江川家の住宅と理解する⁽²⁹⁾。「酒部屋」と称した（実際に酒も造る）屋敷を早雲が蕪山城の東側につくり江川氏に与え、それがのちに修理改築などされて現在につづく江川邸となる⁽³⁰⁾。そのように理解すれば、合点がいく。

江川氏は、蕪山周辺のいくつかの郷村で伊勢（北条）氏の直轄地の代官をつとめた⁽³¹⁾。「酒部屋」（のちの江川邸。以下、便宜的に江川邸と表記）を拝領した江川氏は、おそらく本拠を「江川」地域からそこに移して屋敷として代官をつとめたと推測される⁽³²⁾。江川氏が京都の土倉・酒屋であったことは先に述べたが、土倉・酒屋は、荘園の請負代官をつとめることがある⁽³³⁾。先述のように、土倉・酒屋であっても金融業者・酒造業者とは限らないが、江川氏は酒造業には従事していたであろう。そして業者だったかどうかはともかく金融活動を行った可能性はあり、請負代官の経験もあったかもしれない。少なくとも早雲は、土倉・酒屋であった江川氏の資金力や、算用や債権回収や資産運用などのスキル・能力を見込んで代官に任命したと理解できる。

江川邸は、早雲の居城蕪山城の東側の要所であったらしい。齋藤慎一氏は、城内の「中心となる居住空間」、城主や有力家臣や伊豆国の領域支配を担う郡代の代官所が集まる居住区の一部だったと指摘する。しかも早雲の次代（北条氏綱）からの居城小田原城から延びる東西道、当時の蕪山城の主要幹線の突き当りに位置した。蕪山城正面の「内宿」（城内に囲われた町場）である山木（伊豆の国市）と蕪山城との関係の要地とされる⁽³⁴⁾。そこで、蕪山周辺の郷村の代官屋敷としても、江川邸が機能したということになる。さらに江川邸の背後に「江川砦」などとよばれる防御施設が築かれ、江川邸と合わせて蕪山城の東側を守る機能も果たすことになったことも知られている。早雲の孫（北条氏康）の代の史料だが、永禄二年（一五五九）の『小田原衆所領役帳』という北条氏のいわゆる家臣団リストに、江川氏当主とみられる「江川」という人物がいて、伊豆衆という軍団に属したことが記載される。江川氏は軍事的には蕪山城に配属され、城内にある屋敷とその付近を守るかたちで、蕪山城の守備をする任務に主に当たったと思われる⁽³⁵⁾。実際、これはよく知られているが、はるかの中に北条氏が滅亡するとき、小田原合戦（一五九〇年）にて、江川氏が蕪山城「江川曲輪」に籠ってそこを守り切ったと『寛永諸家系図伝』に伝わる⁽³⁶⁾。

江川氏は、本拠の（正確には本拠に隣接した）金谷郷で土豪でありながら、江川邸にあって蕪山付近の北条氏の直轄地の代官をつとめ、永禄三年（一五六〇）以降は金谷郷の領主になり、よく知られるように江川酒を醸造して北条氏に提供し続ける。そして次代の近世となった、これを基本的に継承して著名な蕪山代官となっていくが、近世初頭に領主ではなくなる⁽³⁷⁾。よく知られるように酒造は近世中期に止め、本拠地での隔絶した地位は保ちつつ、江戸幕府の代官に特化していく。戦国期から近世にかけ、それまでに培ったスキ

ルを活用し、状況に応じて業務を少しづつシフトチェンジして、たくましく生き残っていった。そのように評価できるだろうか。

むすびにかえて

以上、葦山江川氏の出自と下向について分析してきた。江川氏の出自について、あくまで推測による一説に過ぎなかった京都の土倉・酒屋の宇野氏一族であったことを裏付けうる同時代史料により、京都は姉小路烏丸の宇野氏が伊豆国に下向したものが江川氏であるという結論に達した。京都以前のルーツについては、近世初期の『寛永諸家系図伝』にある伝承を尊重するのが良いと思われる。大和国出身で大和源氏の末裔と伝わる³⁸⁾、京都のいわゆる町衆(土倉・酒屋)。それが江川氏の出自であったと考える。

そして下向の時期を明応期ごろ、早雲が伊豆国主になった頃と考えた。下向した際の最初の居住地・名字の地は後の内中村にあたる地であり、そこから早雲に葦山城の東側に屋敷(のちの江川邸)を「酒部屋」として与えられ、そこを本拠としたと推定した。

宇野氏が伊勢氏と被官関係を結んでいてそれが下向に何らかの寄与をしていた可能性も指摘した。だが、その詳細は分からなかった。伊勢氏との被官関係により酒屋としての技能を買われて招かれたのか。京都で被官であったという伝手をたどって、宇野氏がいわゆるビジネスチャンスを見ずから求めて、早雲が国主となった伊豆国へ下向したのか。もしかすると、備中伊勢氏の被官であることによつて伊豆国に連れてこられたのか。いくつか可能性を想定できるが、それを語る史料はいまのところ見当たらず、いずれとも決しがたい。今後の課題としたい。

このたび管見に入った同時代史料や最新の研究に導かれ、江川氏の出自と下向についてかなりのことが判明した。伊豆国に下向した後も、京都にいたときの檀那寺であったとみられる本圀寺と交流を持っていたことが分かっている³⁹⁾。伊豆国で繁栄しながら、遠く京都とも関わりをもつ一面をみせている。戦国大名権力に埋没しているように理解されがちな大名家臣・代官にとどまらない、戦国期の江川氏の特質を垣間みせるような一面である。その分析・検討を次の課題としたい。

註

1) 関根省治『近世初期幕領支配の研究』(雄山閣出版 一九九二年)、村上直「天領の成立と代官の位置について」(『法政史学』四八、一九九六年)、仲田正之『葦山代官江川氏の研究』(吉川弘文館 一九九八年)、同『近世後期代官江川氏の研究—支配と構造—』(吉川弘文館 二〇〇五年)、有光友學「江川文庫所蔵 北条氏発給文書等の紹介」(『古文書研究』七〇、二〇一〇年)、高橋敏『葦山代官江川家と地方支配』(岩田書院 二〇一一年)、ほか多数。

下向はそれまで語られていた早雲の頃ではなく天文九年以降、北条氏の世代で言えば二代氏綱の最晩年以降であったということになる。よつて右の説は成り立ち難い。江川氏と外郎氏は、もともと一族であった可能性も勿論あるが、ひとまず別物と扱った方がよさそうである。史料に基づかず考えにくい想像や、近世後期の考証で付会や混同・誤解が多く混入したとみられる信頼性の低い史料の記載を、無批判に事実として（たとえば江川氏と外郎氏の系図を安易に結びつけるなど）論を進めるような理解には、賛同できない。

12) 天文六年（一五三七）四月一八日付馬術伝書に「江川孫太郎吉直（花押）」と記載があり（「江川文庫」『静岡県文化財調査報告書 六三（二〇一四年）調査番号 H8-16-17。以下、江川文庫の史料について「江川文庫」H8-16-17というように略記）、本圀寺（京都府）の住持日助からの書状の包紙に「江川孫太郎殿」との充名がある（後掲註14史料参考3）。日助の住持就任年は、永正一八年〜天文二二年（一五二二〜一五五三）である。

13) 地主智彦「口絵 江川家宛本国寺住持等発給書状」（『日本歴史』七八三、二〇一三年）。

14) このうち、江川氏当主の系譜をさぐるのに有益とおもわれた史料は、すでに前掲註4拙稿にて翻刻した。それ以外の史料の翻刻を、参考までに次に挙げる。

【史料参考1】本圀寺日助書状（「江川文庫」H8-33）

〔口絵参照〕

幸便之間、令啓一筆候、其以後久不申通候、御床敷候、将亦此玉瀧房下向候、路次之儀御指南頼入候、不図御参詣待入候、恐々謹言、

三月廿一日 日助（花押）

江川又太郎殿 （英元）

御宿所

【史料参考2】本圀寺日助書状（「江川文庫」H8-38）

〔口絵参照〕

態円定坊差下候、仍御祈禱之守本尊一幅、認遣候、弥御法力堅古之儀、肝要候、不図御参詣待候、委曲彼口上候、恐々謹言、

五月十二日 日助（花押）

江川又太郎殿 （英元）

御宿所

【史料参考3】包紙（「江川文庫」H8-31）

〔口絵参照〕

本国寺

江川孫太郎殿 日助

進之候

【史料参考4】包紙〔江川文庫〕H8-37〕

〔②紙〕

本国寺

江川太郎右衛門尉殿 日勝

進之候

【史料参考5】本圀寺日禎書状〔江川文庫〕H8-41〕

〔切封〕

当春上洛之砌者早速御下、御残多令存候、随而雖微少之儀候、板之物一合遣之候、将亦守壹幅女中へ遣入候、猶巨細使僧可被申候、恐々謹言、

九月廿五日 日禎（花押）

江川肥前入道殿（英吉）

しゆく所

【史料参考6】本圀寺日禎書状〔江川文庫〕H8-32〕

〔①紙〕

返々肥州（江川英吉）御勇健事、一語申度候、期再信候、以上

其以来者、不得好便故、不能一書候、去年下向之砌、芳慮芳情之儀、于今不忍、且夕申遣事候、然者此鷺山坊本立寺之啓運（鈴カ）妙一檢之望候間、粉骨間、本立寺へ申越候、恐々謹言、

十月十三日 日禎（花押）

江川太郎左衛門尉殿（英長）

しゆく所

この翻刻には、小川雄・神田裕理・谷口雄太の各氏に多大なご協力を頂きました。橋本敬之氏はじめ江川文庫の方々には、収蔵庫の改築中にもかかわらず快く応対して頂き、写真版の閲覧複写もお許し頂きました。この場をお借りして感謝申し上げます。

15) 西ヶ谷恭弘「戦国期の清酒生産と江川酒」〔戦国史研究〕一八、一九八九年、ほか。

16) 小野晃嗣「中世酒造業の発達」〔同『日本産業発達史の研究』法政大学出版局 一九八二年、初出一九二八年〕一二九頁・一四二～一四四頁ほか。

- 17) 酒匂由紀子「応仁・文明の乱後の酒屋・土倉と「武家被官」」(前掲註6酒匂氏著書、新稿)。
- 18) たとえば、前掲註8河内氏論文。
- 19) 酒匂氏前掲註17論文一九〇頁。
- 20) この史料の年次は、日助の就任年である永正一八年に比定されている(前掲註13地主氏口絵解説)。
- 21) 『増訂豆州志稿 伊豆七島史』(長倉書店 一九六七年) 四二二頁。
- 22) 冒頭に述べたように、江川氏の最初の下向先を三島とする説がある(前掲註11)。しかし、明応期ごろに京都から伊豆国に下向したとなれば、葦山付近に先立って三島に居を構えるとは考えにくい。三島に「宇野」などの地名があるというだけでは、この場合、根拠としてあまりに弱いと思う。註4に同じ。
- 23) 註4に同じ。
- 24) 仲田氏前掲註5論文三五頁。
- 25) 天正十八年金谷村検地帳写(『葦山町史』五上―三五号)。
- 26) 『葦山町史』一一―四五頁。
- 27) 寛文七年水論裁許絵図(『葦山町史』五下 付図)。
- 28) 重要文化財江川家住宅修理委員会編『重要文化財江川家住宅修理工事報告書』(同委員会編 一九六三年) 三〇―三二頁ほか。
- 29) 同「建築史学における「建造物の考古学」とその可能性」(『日本考古学』一三―二二、二〇〇六年。以下、モリス氏の見解はこの論文) 六四―六五頁。ただしモリス氏は、早雲没後に伊勢(北条)氏の本拠が葦山城でなくなったあと、空いた城近くのこの一等地に建てたと推定する。この推定は、江川氏について従来の理解、本拠地から遠く離れた小さな郷村を一つ知行する程度の「中流地侍」にすぎないという評価を前提としている。しかし前掲註4拙稿や本稿のこれまでの指摘により、その過小評価は成り立たない。「酒部屋」にかかわる早雲の伝承を素直に解し、早雲のときに「酒部屋」＝江川邸の前身の建物がたてられたと理解すべきである。
- 30) 江川邸の主屋は一六世紀末―一七世紀初期の建築で、「酒部屋」の「修理」の伝承(寛永諸家系図伝三(統群書類従完成会 一九八〇年)一八七頁)から「文禄・慶長頃」(二五九三―二六二五年頃)の建築とされる。そこに「古い室町頃の住宅系の建物」が取り付けられ、江川邸は現在の規模になったとされる(前掲註28報告書五頁)。モリス氏は、この「住宅系の建物」を近世初期の葦山城廢城に伴い移築された同城の御殿とする(同氏前掲註29論文六〇、六二頁)。魅力的な説だが、これも先に述べた江川氏への過小評価が前提となっているため、賛成まではできない。たとえば、江川氏が戦国期に「住宅系の建物」を自ら建てた可能性もある。
- 31) 註4に同じ。
- 32) もちろん、本拠を江川邸に移したのちも、江川氏は「江川」地域の屋敷を放棄したわけではなく、そこを拠点に付近の土地を開発した(その結果が、のち内中村の「江川分」と理解しうる)。
- 33) 須磨千穎「土倉による莊園年貢収納の請負について―賀茂別雷神社の所領能登国土田庄の年貢収納に関する土倉野洲井の活動―」(同『莊園の在地構造と経営』吉川弘文館 二〇〇五年、初出一九七一年)、河内将芳「酒屋・土倉の存在形態―角倉吉田を中心に―」(前掲註8河内氏著書、初出一九九一年) 三三三

三四頁、ほか。

34) 齋藤慎一「葦山城跡の構造と変遷」(同『中世東国の信仰と城館』高志書院 二〇二〇年、初出二〇一四年) 三一〇頁、三一四頁、三一六―三一七頁ほか。

35) ただ、葦山城の防備だけでなく、江川氏が北条(伊勢)氏家臣として軍事的にはたらいだ形跡もないわけではない。江川氏の当主や一族・家臣が軍功をあげた傍証がいくつみられる。まず、江川英元の話となっていて世代が若干ずれるが、早雲が「武威を伊豆・相模にふるふとき」[これにしたがひ、忠功]があったと伝わる(前掲註30『寛永諸家系図伝』三一―八六頁)。

また、江川英吉(英元の子)が小田原合戦のとき徳川氏の家臣小笠原安次父子を討ち取ったとも、これは近世後期の系図『寛政重修諸家譜』の記載だが、伝わっている(『葦山町史』六十一―四三頁)。安次が討ち死にしたのは、天正一〇年(一五八二)九月に三枚橋城(沼津市)から松平康親率いる徳川氏の軍勢が伊豆国を攻めた戦い(石川正西)「聞見集」に伝わる。三島(三島市)付近で小笠原らは刈田狼藉(敵地の田畠を刈り取る略奪行為)をしていた。そして深入りしたところを北条氏方の「かまり」が討ち取った(『大日本史料』一一―二)。「かまり」つまり伏兵として小笠原安次を討ち取ったのは江川英吉であった可能性がある。ちなみに安次の子については、三方ヶ原の戦い(一五七三年)で戦死した小笠原安広と負傷した小笠原安勝が伝わり(『寛永諸家系図伝』四〔統群書類従完成会 一九八二年〕二二六頁)、安次とその子が同時に戦死した旨の伝承はこのあたりの混同があると思われる。

36) 前掲註30『寛永諸家系図伝』三一―八六―一八七頁。
 37) 註4に同じ。
 38) ちなみに、先論が江川氏のルーツの候補として挙げる播磨国の宇野氏は、赤松氏支族で村上源氏である(太田亮『新編 姓氏家系辞書』(秋田書店 一九七四年)二〇四頁、赤松系図・同略譜〔群書類部集〕三〔統群書類従完成会 一九八五年〕四〇六―四七二頁)。大和国の宇野氏とは、明らかに別の氏族である。

39) 前掲註13地主氏解説、橋本敬之『幕末の知られざる巨人 江川英龍』(KADOKAWA 二〇一四年) 四五頁、ほか。